

仏教者は新型動力炉命名にどう関与したか？

——「もんじゅ」「ふげん」命名伝説の虚実——

工 藤 英 勝

一 曹洞宗の常識は世間の非常識か

曹洞宗の要職者・大本山の貫首（住職）が、高速増殖原型炉「もんじゅ」と新型転換原型炉「ふげん」の命名に何らかのかたちで関わったということは、なかば曹洞宗の僧侶間では「常識」化した伝説となっていた。⁽¹⁾

この曹洞宗の「常識」にはたして信憑性があるのか？二〇一一年十一月に永平寺町で開催されたある行事を契機⁽²⁾に、この命名伝説をマスコミが追いかけたが、一向にこの命名伝説を裏づける記事や情報はおろか、その痕跡すら出てこない。

さらに不思議なことには、当の永平寺が一九九六年時点ですでに貫首命名伝説をみずから撤回⁽³⁾している。

二 疑問の氷解

ある記録が存在する。それも秦慧玉^{はたえぎよく}禪師自身による一九八二

年の文章だ。⁽⁴⁾

この記録から直接読み取れる事柄は、

① 新型動力炉「もんじゅ」「ふげん」の命名行為には、秦師は助言を含めまったく関与していない

② この文章の執筆時点で、秦師は「もんじゅ」「ふげん」の命名者とは面識はない

③ 秦師に「もんじゅ」「ふげん」の命名についての話題を提供したのは、命名者ではなく、その友人の市原豊太氏である。市原氏は同時に秦師の友人でもある

④ 命名者には市原氏を通して、秦師の揮毫が渡っている

⑤ 「もんじゅ」「ふげん」の命名に秦師は関与していないが、命名後にこの由来を聞いて、それを賛嘆している

ちなみに、市原豊太氏はフランス文学者で、獨協大学、東京大学教授を歴任し、秦師とは旧制浦和高等学校の教員時代の同僚である。奇怪な命名伝説の謎はこれでほぼ氷解した。

三 命名への直接の関与はなかったが

巷間に蔓延してきた秦慧玉禪師・永平寺貫首による新型動力炉「もんじゅ」「ふげん」命名伝説の実態・正体は、秦師の友人との会話における「もんじゅ」「ふげん」名称への「感激」という反応にあった。

直接にも、間接的にも命名行為のために、秦師は関与していないし、原子力政策推進に積極的に関わってはいない。

しかしながら、肯定的な感想を述べ、事実と異なるかたちであっても、永平寺の要職者が命名に賛同しているという噂が蔓延してきたということは、ある意味では、「もんじゅ」「ふげん」に代表される国産技術の新型動力炉にもとづく原子力政策を翼賛する社会的効果をもってきたといわざるを得ない。

四 新型動力炉の命名経緯とその由来

さて、国産技術による新型動力炉の命名には、動力炉・核燃料開発事業団（動燃）の副理事長（当時）であった清成迪（きよなりすすむ）氏が主導的な役割で関わっていた。ただし、これは清成氏一個人の発案によるものではなく、当該事業団および日本政府が機関決定している。『動燃二十年史』⁽⁵⁾『動燃三十年史』⁽⁶⁾には、一九七〇（昭和四五）年四月八日に茨城県

仏教者は新型動力炉命名にどう関与したか？（工藤）

大洗町に建設中の大洗工学センター開所を機会に、高速実験炉を「常陽」、高速増殖原型炉を「もんじゅ」、新型転換原型炉を「ふげん」と命名している。

『動燃二十年史』の巻頭グラビアには、文殊、普賢両菩薩像を掲げ「巨大な力を智慧と慈悲で制御」という表題で、「もんじゅ」「ふげん」の由来を次のように述べている。

文殊、普賢の両菩薩は、智慧と慈悲を象徴する菩薩で、獅子と象に乗っている。それは巨獣の強大な力を智慧と慈悲で完全に制御している姿である。原子力の巨大なパワーもこのように制御され、人類の平和と幸福に役立つのでなければならない。動燃が開発する明日を担う発電炉―高速増殖炉と新型転換炉の原型炉にそれぞれ「もんじゅ」「ふげん」と命名したのはこのような悲願によるものである。

国家プロジェクトによる新型動力炉建設事業の正史に、政教分離原則が疑われかねない菩薩尊像が堂々と掲載されているのは、異例中の異例である。それを実現にこぎつけたのは、発案者の清成迪氏の並々ならぬ熱意があったからであろう。

五 仏教学会関係者が命名に助言か

清成迪氏が動燃の副理事長在職期に、新型動力炉三基にそれぞれ「常陽」「もんじゅ」「ふげん」という命名を発案したことはすでに述べてきた。

ところで、ここで素朴な疑問に遭遇する。

仏教者は新型動力炉命名にどう関与したか？（工藤）

清成氏がいかに仏教に造詣が深くても、前節に引用したような両菩薩の説明は、動力炉命名使用の是非はひとまず措くとしても、素人が考えたような文章ではない。かなり専門的な知識と信念がなくては公けにはできない性質のものである。命名の発案と決定に清成氏が主導的に関わったことは疑いようのない事実であるが、専門家からの助言はまったくなかったであろうか？

キーマンは関根瑛應（せきねえいおう）氏である。

宗門の最重要講座の安居でなぜ原子力の話か。それは当時、本山の最高顧問であった宮本正尊博士からの要請で、仏教者も最新の科学技術についての智見を持つ必要があるとの趣旨によるものであった。：〈中略〉：宮本博士には、その後、新型動力炉の命名に関して種々高見を賜ったが、博士から、文殊、普賢と並んで「法蔵」の名が持ち出されたことがあった。：〈中略〉：この提案はしかし、サイトの地名を重んずる「常陽」へと移行した。⁽⁷⁾

関根氏は浄土真宗寺院の出身で、動燃の広報室長として原子力の平和利用のPR活動に携わっていた人物であり、清成氏による命名の経緯も熟知している。彼は命名発表前の一九六九（昭和四四）年七月に、宗派本山の「安居」（会場は宗門関係大学）に招かれて、原子力発電事業の特別講座を担当している。関根氏の回顧によれば、新型動力炉命名考案の途中、清成氏が仏教学、国文学の学界首脳と懇談し、名称についてかなり具体的な助言を得ていたらしいのだ。それも実

験炉「常陽」の名称は当初、阿弥陀如来の因位の菩薩名「法蔵」が考えられていたとは驚きである。

さらに関根氏は新型動力炉命名に助言した複数の学識者に具体的に触れ、

この命名にあたって、当時の副理事長、清成迪氏が、仏教学界の長老、宮本正尊師や国文学の泰斗、土岐善麿先生と真剣な討議を交わされ、賛同を得られた経緯を、わたしはつぶさに承知しております。⁽⁸⁾

と証言している。宮本正尊氏は日本印度學佛教學会の初代理事長で、国文学者の土岐善麿氏も浄土真宗寺院出身者と伝えられる。

六 仏教者の命名関与・容認の歴史的責任において

筆者は所属教団の中で喧伝されていた大本山貫首命名伝説への疑問から発して、貫首は命名自体には直接は関与していないことと、実際の命名にあたっての助言者はまったく別人物であったことを知るに至った。

大本山貫首命名説には、ふたつの過誤があると考ええる。ひとつは当事者が手記に明記している事実関係が極度に歪められてまちがった「美談」にされていること。もうひとつは、新型動力炉の命名への助言・提案に関わった真の「功労者」を詐称していることである。さらにつけ加えれば、公式の助

言ではないにせよ、仏教学会を含む学界の指導者がこの命名に具体的に関与している事実を覆い隠してきたことである。

新型動力炉命名に関しては、命名の前後はありながらも、当時の本山僧侶だけではなく仏教学界も含め好意的な評価を示していたことは確認できた。仏教界の大勢としては、日本政府と企業体がナショナルプロジェクトとして推進してきた原子力政策をほぼ容認してきた。

仏教者が命名以前に助言をしたり、命名後にその由来を聞いて感激したりしてきたことや、今日このことを仏教の教えにもとづいて否定的に評価することの前提となる「仏教」とはいったい何かが厳しく問われなければならないことはいうまでもない。

たとえ善意にもとづくにせよ、命名に関与した歴史的な責任は仏教者の共業として担わなくてはなるまい。状況や世情が一変したことによって、その責任をいとも簡単に放棄するのであれば、その仏教理解じたいが欺瞞の当体であることを表明するに等しい。

- 1 松本健雄『『もんじゅ』と『ふげん』』『曹洞宗報』第九一三号、二頁、二〇一一年十月一日。
- 2 永平寺禅を学ぶ会特別講座「いのちを慈しむ―原発を選ばないという生き方」二〇一一年十一月二日。
- 3 編集子「編集後記」『傘松』第六三〇号、九四頁、一九九六

仏教者は新型動力炉命名にどう関与したか？（工藤）

年三月十日、同書第六二八号「編集後記」、「◇もう十五年以上も前の事になるが七十六世秦慧玉禪師が名前を依頼されて『文殊・普賢』と命名したと言うことを僧堂の提唱等で伺ったものであった」の記事を撤回。

- 4 不老閣主「文殊と普賢」『傘松』第四六三号、六〇七頁、一九八二年四月十日〔新出典拠〕。

- 5 動力炉・核燃料開発事業団『動燃二十年史』六二三―六二四頁・年表、一九八八年十月。

- 6 動力炉・核燃料開発事業団『動燃三十年史』二六頁、一九九八年七月。

- 7 関根瑛應「仏教界の怒りを越えて―『もんじゅ』への期待」『原子力eye』二〇〇五年五月号、二五頁。

- 8 関根瑛應『『もんじゅ』命名の趣旨に理解を―産経新聞（大阪版）一九九六年五月二十一日、五面。

〈キーワード〉 現代仏教、科学技術、原子力発電、新型動力炉、

秦慧玉、宮本正尊、土岐善磨

（曹洞宗宗務庁嘱託員）